



## vol.4 カナダのキッズクラウン達

クラウンが引き出す  
子ども達の意外な一面



玉井良平 Ryohei Tamai

短大卒業後、2004年にオーストラリアでクラウン（道化師）に出会う。帰国後、保育園に勤務する傍ら、子どもたちの創造力の向上を目指してクラウンを学んでもらう、キッズクラウン講座を立ち上げる。10年にカナダに渡り、日系の子ども達を対象に行なった同講座も好評。今回、クラウンを通して得た体験を初めて執筆。日本のキッズクラウン達を連れて、カナダで海外公演をする事が新たな夢となっている。  
[www.child-entertainment.net](http://www.child-entertainment.net)

トロントでのワークショップを終え、そのままこの街でカナダに住む日系人の子ども達を対象にキッズクラウン講座を開くことにした。その説明会で、とてもおとなしそうにしている女の子に目を引かれた。「こんなにおとなしくて大丈夫かな？」最初はそう思った。なぜなら、クラウンのコメディや感情表現は、大人でも「恥かしい！」と思ってしまう事が少なくない。それを事もあるうかが、こんな若輩者が教えるのだ。「恥かしいがったらどうしよう」そんな不安がよぎった。

ところが、いざ講座を始めてみると、その女の子は誰よりも喜んで取り組んでいた。それどころか発表の場を与えると、自ら手を挙げて人前に立ち、学びたてのコメディやパントマイムを披露していた。

クラウンには、本人が普段隠して見せようとしないう一面を引っ張り出してしまふ魅力が確かにあった。

小学生の男の子は知らず知らずのうちに、みんなに優しく声をかけ、リーダーシップを発揮するようになったし、恥かしがって人前に立ってなかつた男の子が、最後の発表会では皆が驚くほどの大きな声を出して、会場を沸かせた事もあった。

もちろん初めから、うまくいった訳ではない。毎週まるで違う様子の子ども

も達相手に悪戦苦闘が続いた。今週は話をまともに聴いてくれたなど安心してると、同じ子が次の週はどこ吹く風だと言わんばかりに話を聞かなかつたりと、正に暗中模索の繰り返しだった。僕は丁寧な説明を意識して、グループの1人がクラウンワークショップを理解していなければ、中断して理解するまで説明した。発表会に向けてのメイクアップも希望者のみに行なう事にして、「子どもの心に負担をかけない」事を意識した。すると、子どもたちは自分たちで納得してステージに立てる様に、用意された選択肢の中から自分達の気に入ったものを選んで、発表会への準備を進めていった。最初は「メイクをしない」と言っていたが、ある日ひよここと「やっぱりメイクがやりたい」と言うてきた子もいた。「みんなと同じ」ではなく、「自分に合ったものを自分で選ぶ」過程が大切なんだと子どもたちに教えてもらった。

実に個性豊かなキッズクラウン達だったが、さすがに発表会当日は、緊張の色を隠せずにいた。メイクアップをした後に「やっぱりメイクをしたくない」という子も出てきて、僕は内心途方に暮れていた。その時、ある女の子が、メイクアップを進んで受け、「どうだ！」と言わんばかりにクラスに入って行った。その子が見せ

たここ一番の舞台度胸に僕は舌を巻き、他の子ども達は勇気をもらっていた。「そっだ！僕たちは1人じゃない！」6人揃うとキッズクラウン達にいつもの笑顔が戻っていた。

発表会は、大盛況の内に幕を閉じていた。子ども達が支えあい、1つものものを創り上げていったその姿は僕自身にも大きな学びを与え、発表会で見せた彼らの表現力は、周りの大人達を驚かせ、笑いで包んだ。写真を見てほしい。何も言わずとも、思い思いの表情とポーズで写真に収まっている。彼らは3か月の講座の中で、立派な「クラウン」に成長していった。

